

書評

松浦友久 『詩語の諸相——唐詩ノート——』

東京・研文出版 一九八一年四月 二五四頁

著者は前著『李白研究——抒情の構造——』（東京・三省堂、一九七六年三月）において、李白という一人の詩人を取りあげて、題材論的な觀點と様式論的な觀點を發想の軸とし、様々な角度から李白の詩についての論を展開された。本書では、詩語の面から、題材論的觀點を中心に、唐詩の讀解に對して多くの貴重な意見が提出されている。詩語についての專論であるというその形式だけでなく、解釋に至るまでの方法論、また詩語の中に著者の見出そうとする中國的な感性、表現感覺など、この書には見逃すことのできない興味ある問題が含まれている。

各章は、もともと別々の論稿として發表されたものであるが、補訂を加えて一冊の書としてまとめられた。二部に

分けられ、各々次の様な構成になっている。

第一部

- 一、中國詩の性格——詩と言語
- 二、「猿聲」考——詩語と歌語Ⅰ
- 三、「蛾眉」考——詩語と歌語Ⅱ
- 四、「斷腸」考——詩語と歌語Ⅲ
- 五、詩語としての「怨」と「恨」——閨怨詩を中心に

第二部

- 六、耶娘妻子走相送——唐詩の白話的表現と厭戰詩の發想

〔付説〕 ふたたび「耶娘妻子走相送」について——戰爭詩における「主題」と「素材」の異同を中心に

- 七、長安一片月——「一片」の用法とそのイメージ
- 八、烽火連三月——數詞の聲調をめぐって

〔付説〕 「沙場」考

- 九、却話巴山夜雨時——詩語とその條件
- 十、憶君遙在瀟湘月——離別詩における時間の表現

十一、一水中分白鷺洲——詩材としての風土

十二、兒女共霑巾——名詞の副詞化が意味するもの

個々の章がかなり獨立性の強い論稿となっているので、順を追って簡単に内容に觸れておこう。

まず第一部第一章は「序論的性格をもつ」（著者あとがき）。この章については後に述べる。

第二、三、四章は、副題からもわかるように、同様の主題で貫かれており、詩語の成立過程やイメージの特色について論じられている。この三つの章では、日本の漢詩や和歌との詩語の比較が行なわれ、兩國の感性、抒情感覺の差異が指摘される。

第五章は、六朝隋唐期における閨怨詩の用例から、詩語としての「怨」と「恨」の中核的な概念の規定が試みられる。字書的な意味だけではなく、詩語としてどのような違いを示しているのかが明らかにされる。このような基礎的な仕事は從來あまり見られなかったが、もっとなされてもよいのではないかと考える。

書 評

第六章以下の第二部は、特定の詩句をとりあげて從來の解釋の當否を判斷するのであるが、副題にみられるように著者の意圖するところは、單に解釋のみにとどまらない。

第六章は、杜甫の「兵車行」中の「耶娘妻子走相送」をとりあげる。傳統的な厭戰詩・反戰詩において、出征兵士を見送る場面では子供が登場しないことから、「妻子」は文言的表現の「妻と子」ではなく、白話的表現の「妻」の意味に解釋されるべきだと説く。

第七章は、李白の「子夜吳歌」中の「長安一片月」をとりあげる。「一片」が「小さなまとまり」（一とひら・一とぎれ・一とかけ・一枚、等）を意味する傳統的・古典的・書面語的な文言系の語彙語法（基本的用法）であるのか、「大きな廣がり・長いつながり」（一面の・一としぎりの、等）を意味する非傳統的・俗語的・口頭語的な白話系の語彙語法（派生的用法）であるのかという觀點から、唐詩の用例を吟味し、基本的用法でないと考えるのはきわめて困難であるとする。

第八章は、杜甫の「春望」中の「烽火連三月」をとりあ

げる。數詞においては、平仄が極度にアンバランスであり、一から十までの數詞では平聲が「三」しかないことに着目している。そして、平仄對立をもつて韻律の基幹とした唐詩のジャンルにあつては「三」が「三」ゆえに多くの意味を擔わざるを得なかつた（一八三頁）としている。このことから、「烽火連三月」の「三月」は、平仄からいって「三」しか用いることができなかったものであり、實際の數に限定する必要はなく、不特定多數としての要素が強く含まれているとする。しかし、評者は、この詩において「三」が不特定多數の意味あいを持つという著者の説はもうひとつ決定的ではないように思う。

第九章は、李商隱の「夜雨寄北」中の「却話巴山夜雨時」をとりあげる。ひとつの文藝様式には、それ獨自の表現感覺をもつ語というものがあるという觀點から、近世白話小説獨特の表現感覺をもつ、「却説」「且説」などの用例を用いて唐詩の解釋に援用することは不適當であることを説く。そして「却話」が、詩のコンテキストからも、また唐詩の用例からも、文言系の「ふりかえって語る」「想い返して

話す」というように解釋するほうが適切であるとする。

第十章は、王昌齡の「送魏二」中の「憶君遙在瀟湘月、愁聽清猿夢裏長」をとりあげる。主題論的な立場から、離別詩のもつ複合的時間表現への可能性について述べる。解釋の問題については「憶」という動詞の用法から、その動作の起點をずらせることにより、「遙在……」以下の主語は、作者ではなく送られる側の魏二であるとする。

第十一章は、李白の「登金陵鳳凰臺」中の「一水中分白鷺洲」をとりあげる。題材論的な觀點から、詩に用いられる風土の題材としての性格を、詩の發想との關わりにおいて、解釋の爲の方法として援用しようとする。これについては後で觸れる。

第十二章は、王勃の「杜少府之任蜀州」中の「兒女共沾巾」をとりあげる。多くの用例から、「兒女」が「兒女のように」という副詞的な用いられ方をしていることを論證する。しかし、著者の眼は、このことに表われる「言語と思考、言語と對象認識といった點で、きわめて中國的な、興味ある傾向」（二四四頁）というところに向けられている。

本書で特徴的に見られるのは、題材論的觀點（素材・主題を含めて）の方法論としての運用、中國的な感性、表現感覺への度重なる言及、それに關連して、日本の漢詩や和歌との比較ということである。これらに注意しつつ、疑問點を中心に感想を述べていきたいと思う。

まず、序論的な性格をもつ第一章からみていこう。この章は詩の定義にはじまり、抒情詩・敘事詩・劇詩という從來の詩の分類についての異議、訂正、また韻律・抒情兩面から抒情詩としての中國詩の適性について、その性格などが論じられる。ここで特に注意しておきたいのは「一般的にみて、中國人の思考や感覺では、具體的・箇別的なものが大切にされる」（二〇頁）という指摘と、詩語について「中國社會の傳統の一つと言ふべき典型愛好の傾向が詩語の形成と繼承にも大きく作用している」（二一頁）といわれる點である。第三章「蛾眉」考、第四章「斷腸」考で中國ではなぜこのような形容が好まれるかという問題について「多様なイメージの、具體的事物で、形容していく中國的感覺」（五九頁）、一般に、中國語（漢語）の表現習慣にあ

つては、具體的・具象的なイメージが好まれる」（八四頁）とその原因が説かれる。また第十二章でも「名詞の副詞化」にみられる「中國的な、興味ある傾向」（二四四頁）として「その一つは、物ごとを具體的・箇別的な形で捉えようとする傾向である。それはまた、實在する現實の感覺や知覺を重視するという態度でもある」（二四四頁）といわれる。

また「典型化の愛好」は「名詞の副詞化」にみられる「中國的な興味ある傾向」のもう一つの特徴として「物ごとの性状を典型化・集約化して捉えようとする傾向」（二四六頁）として指摘される。具體的には、「兒女のごとくに巾を濡はす」という句で、「兒女」は「濡巾——泣く」という行爲のもつ諸感覺の集約・典型として機能していると見ることができるわけである」（二四六頁）ということである。この「典型化の愛好」は、第六章や第十一章にみえる方法論においてもその基礎的認識としてみられる。これは先の具體的表現に對する好みとともに、著者の論の基調に深く關わっているといえるだろう。

著者は、中國的な感性なるものを日本的な感性との比較を通してより明確にしようとする。それが、第二、三、四章である。また、第六章でも和歌を比較の対象とする論がみえる。第二、三、四章は各々「猿聲」「蛾眉」「斷腸」という詩語の成立過程が考證されるが、著者は、日本の古典詩歌である和歌を比較の対象として、中國、日本兩國の詩歌における表現感覺の差異を述べることにより重點をおく。いずれの例も日本では漢詩には詩語として用いられないながら、和歌にはそれに對應する日本語が用いられていないという點に着目し、それらの詩語が日本的な抒情感覺、表現感覺にとつては異和感、嫌惡感を抱かせるものであった爲に詩語として定着しなかつたという。「斷腸」については日中兩國における動物臟器への知識や關心の差、食習慣の違いが根本にあることが考證され、より積極的な理由として先に述べた中國における具體的・具象的イメージに對する好みと日本における表現の醜化・非限定化の愛好があげられる。この章については問題はないが、「猿聲」「蛾眉」については少々氣にかかる點がある。

まず「猿聲」が和歌にうたわれない原因を著者は、その基調にある物理的な鋭さ、カン高さ」を「抒情表現の具として是一種の異和感をもって受けとめる日本的・日本語的な感性」(三七頁)に求めている。ここで唐詩の場合を考えてみよう。著者もいう如く「巴東三峽の「漁者歌」の發想を中心に置きつつ、より廣くは、長江系の風土一般における愁人・遷客の悲哀をいや増すものとして、うたわれている」(三〇頁)のである。つまり、長江という中國の特定の風土ときわめて密接に結びついたものとして詩語のイメージが形成されているのである。「漢詩という外來の形式による知的文藝語」(五四頁)として「猿聲」が用いられるのは、六朝から唐にかけての詩語としての安定ということからみれば、ある程度うなずける。従つて、日本固有の文學である和歌の場合、中國の特定の風土と結びついたうえに成り立っている「猿聲」に對應する詩語が詩語として用いられなかつたからといって、決して不思議な現象でもないように思えるのだがどうだろうか。日本人の音感の好み以前に考えられてしかるべきではないか。

また、和歌に「猿」の聲がうたわれないこと以外に、當時の音感の好みを示す例がもう少し詳しくあげられていることが望ましいと思う。でないと、「傳統的音感」（三七頁）とか「日本的な音感の好みから言えば」（三七頁）というような言い方がもうひとつ實感としては傳わってこないように思う。

「蛾眉」についても「もつとも根本的なものとしては、日本人の視覚的・觸覺的な生理想感として、「蛾」は美感・美意識の對象となりにくいこと、色彩も鱗粉もむしろ異和感や嫌惡の對象となりやすいことが指摘されるべきであろう」（五二頁）と、日本人の感覺を重要な論據としているが、「蛾」そのものが和歌に出てこないことだけでなく、當時の人々に嫌惡されていたことを直接示す例證を何かあげるべきではないか。このようなことにこだわるのは、評者には、「傳統的」「日本的」ということで古代から現代までを包含してしまう態度に何か釋然としないものを感じるからである。それは「中國的」という言葉についても同様である。凡そ、このような言葉を使用する場合、慎重でな

ければならないと考える。

次に、題材論的觀點の詩の讀解への援用という面から、第十一章と第六章についてみてみよう。

第十一章では、「白鷺洲」がどこに在ったのかということと、「一水」「二水」（テキストによって「二水」に作るものがある）の適否が判斷の對象とされる。ここで著者はこれらの問題の考證よりもさらに重要な點として、①古典詩における「題材」というものが、實はそれぞれに何らかの發想上の特色、いわば一種の認識パターンをもっていること、②唐詩のような傳統性の強い詩歌を正確に讀んでいくためには、この點への留意がとりわけ必要かつ有效だと考えられること、③「白鷺洲」によって中分されるのは秦淮である」とする從來の多くの諸注の不適切さも、この點への留意によって未然に防ぎえたのではないかと考えられること——等々、唐詩の讀解に關する一連の題材論的觀點を、一種の方法論的な立場として提示」（二三頁）することをあげる。そして「この詩にあっては、白鷺洲によって中分されるのは長江であるのが自然だ、という見方が、素

材論（もしくは主題論）的に可能なのではないか」（二三頁）という。この詩では、舞臺が金陵であり、「白鷺洲」が長江中にあることは、いくつかの資料から確認されているから、著者の見方の有効性は保證される。しかし、他の詩でも有効であるかということになると、よくわからない。風土を對象とする場合、資料による確認なしでは、可能性の段階にとどまらざるを得ないのではないだろうか。一方、また、解釋が、概ね蓋然性の問題であることと考え合わせると基本的にはその有効性は認め得るといえる。しかしながら著者の指摘を待つまでもなく、このような見方は詩の讀解のうえで從來から留意されていたのではないかと評者には思われる。

第六章は厭戰という特定の主題をもつ詩とそこにみられる傳統的發想について論じられる。「妻子」が白話的表現の「妻」の意味に解釋されるべきだとする著者はその理由を三つあげている。そして、その最も重要な理由として「中國の厭戰詩・反戰詩の傳統的發想から考えた場合、のこされる父母や妻たちが出征する息子や夫を送るという作

例はほとんど全く見いだせない」（二二六頁）ということをあげる。そして「唐代における著名かつ典型的な厭戰詩としての『兵車行』のみが、こうした文學史的傳統のほとんど唯一の例外でありうることはなほだ困難だと言わなければならない」（二三七頁）とし、「厭戰詩の傳統的發想に立つがゆえに、白話的表現と見るのが自然だ」（二三七頁）と著者は考えるのである。

ここで氣になるのは、著者のあげる資料が「陟岵」をはじめとする『詩經』の作品と、漢魏六朝詩としては、蘇武、李陵の作と傳えられる二首、「木蘭詩」だけであり、唐詩においても、杜甫以前には見られないという點である。これだけの資料によって「厭戰詩・反戰詩の傳統的發想」（二二六頁）なるものを規定し、杜甫の詩をその文學史的傳統の上において考えるということが可能なのだろうか。なるほど、全て子供が父を送るという場面はうたわれたいが、そもそも出征兵士との別離の場面をうたう詩が少ないのである。これだけで、厭戰詩の傳統的發想などというのは、評者には納得できない。『詩經』から杜甫までの空白に近

い部分が餘りにも大きすぎると思う。もし『詩經』の作品に著者がいような表現効果による判断（見送る家族のなかに子供が含まれることは、むしろ厭戦詩における厭戦感情の減殺という結果を生みかねない）が下されているとすれば、別の論據をもって、その原因が當時における「絶子断孫」「沒有後代」への懼れであるということが論證される必要があろう。でないと『詩經』にうたわれる兵士は、子供もいない若者達であつたということではかまわないと考えられるからである。

この章でも日本の詩歌との比較がなされる。日本の防人歌には子供との別離がうたわれるものが數首みられることから、「和歌を作り、讀み、傳える上代日本人の感覺や思考にとって、若い父と子供との生きながらの別れが——質的な面では妻や父母との別れ同様——人生における最大の悲しみの一つとして受けとられていたこと」（二四〇頁）を意味するとし、「そこには、人間の不幸というものに對する民族的な感覺や思考、とくにその差異の部分が、徴兵や出征という一種の極限情況を前にして、きわめて明瞭に表

われていると言えるようである」（二四〇頁）とされている。これからいくと、中國の傳統的な感覺や思考では、父と子の別れは、兩親や妻との別れほど悲しいものではなかつたということになつてしまふのではないか。もう少しこのあたりについての詳しい説明がないと、評者には納得がいかない。民族の感覺や思考に言及する場合、單に、詩にそれが直接に反映しているという指摘だけではなく、別の側面からの論及が欲しいように思う。著者の論證は堅實であり、敬服する面が多いが、この章については、やや論の展開に急でありすぎたのではなからうか。

以上、十分な紹介もできず、甚だ心苦しいが、詩語の側面からの唐詩讀解へのアプローチが、今後より一層の成果をあげられんことを祈りつつ筆をおきたい。

（京都大學 山本敏雄）